

・消えた月かえつてくるまで数えてた羊はいくつ柵を越えたの——眠れない夜に羊の群れを夢見て銀河まで声を届けて

/ 春永睦月

/ ゼロの紙

吹き抜ける風いにしえの響き纏いながら食む月を観ていた——太陽は輝きすぎて神々の影絵遊びを把握できない——影に愛されてかつて月であつたことさえ忘れててしまう愉悦

/ インアン

/ ゼロの紙

一輪の花にくちびる奪われた私を笑い過ぎてゆく風
息のかかるほどの距離に花びらがある秘密の香り漂わせ

/ 春永睦月

/ ゼロの紙

甘やかな意味がひとつもこぼれないように唇から近づいた
息のかかるほどに花びらがある秘密の香り漂わせ

/ ゼロの紙

ミルフィーユのように重なり合う風の時間の手紙を読んでいる
甘やかな意味がひとつもこぼれないように唇から近づいた

/ インアン

手のひらの上で乾いて色褪せてしまうとしても集めてしまう
甘やかな意味がひとつもこぼれないように唇から近づいた

/ インアン

掘り当ててしまうだらうなさくら貝いくら化石になつたとしても
ミルフィーユのように重なり合う風の時間の手紙を読んでいる

/ ゼロの紙

埋もれてもうすべに色の艶やかなまさくら貝は君に会うまでも
掘り当ててしまうだらうなさくら貝いくら化石になつたとしても

/ インアン

唇にあなたの爪を当てる時わたしの額に触れる唇
埋もれてもうすべに色の艶やかなまさくら貝は君に会うまでも

/ インアン

埋もれてもうすべに色の艶やかなまさくら貝は君に会うまでも
唇にあなたの爪を当てる時わたしの額に触れる唇

/ インアン

ぶつくりと息する貝が泡を吐きぼくらの海を作つてゆくよ
埋もれたる骨でかたちづくるならわれらの持たぬ翼の骨格

/ インアン

/ インアン

寝言かな巻貝たちの聞いていた昔の海の内緒話の
飛翔した記憶はあれど翼は持たず何処へも行けずに行合いの空

/ 古井 朔

/ インアン

雪よりも美しい死後 瑙藻はただキルキルと夜降り積もる
埋もれたる骨でかたちづくるならわれらの持たぬ翼の骨格

/ 古井 朔

/ インアン

寝言かな巻貝たちの聞いていた昔の海の内緒話の
飛翔した記憶はあれど翼は持たず何処へも行けずに行合いの空

/ 古井 朔

/ インアン

百円玉入れて肩甲骨揉まれやはり人間だつたわたしは
はみ出していいのはあなた実線と破線が並ぶセンターライン

/ インアン

/ インアン

遠いからこそ惹かれ合うこの夏も色相環の真向かいで待つ
はみ出していいのはあなた実線と破線が並ぶセンターライン

/ インアン

/ インアン

選べても幸せじゃないなんてある?もてあます新宿南口
はみ出していいのはあなた実線と破線が並ぶセンターライン

/ インアン

/ インアン

インアン

短歌は日記のように…
詠みたいときに詠みたい
ものをというエンジョイ勢
ですが、こう言った様々な
試み・プロジェクトも大好きです。ご一緒してくださ
った皆様には、心より感謝
申し上げます。

巻いた分だけの時間を刻みつつ形見の時計は手首で鳴つてゐる

/ 綿鍋和智子

霧時雨とおのく記憶と手巻き時計ゆつくりとりゆうずを回し動く針
/ 古井 哲
/ 綿鍋和智子

ひとしづく湛えてる針葉樹の葉の柔らかさを知る秋の雨
/ ゼロの紙

雨の音ゆつくり沁みてざわめきを秋の森へとしづめていった
/ 水の眠り

秋の森蓄えている雨足も数億年蓄える土壌も
/ 綿鍋和智子

ずいぶんと上機嫌だねあの時の雨音だった渚に触れる
/ インアン

打ち寄せるひとつ泡はどの雲になりたいのかを見上げる浜辺
/ 綿鍋和智子

呼吸する胸の上下の尊さを追いかけている病の母の
/ 一ノ瀬美郷

手のひらに触れる息のこと話してくれた母の呼吸が愛おしい
/ ゼロの紙

斜線に降る雨のこと晩夏の夜の呼吸のように聴いている
/ ゼロの紙

真夜中の残響でした秋の雨どこまでも降る夢の中まで
/ ゼロの紙

金糸雀のこゑは途切れで夢の中うす墨色の雨降りやみぬ
/ 古井 哲

終わらない雨の中に棲むいのち垂直に心降りしきる
/ 春永睦月

差し出せる傘を探しているうちに夢が破れて初秋がはじまる
/ ゼロの紙

傘の皮膚を滑り落ちる雪の声耳を澄ませる胸の余白で
/ ゼロの紙

激しめに開いてしまうワンタッチ折れそうで折れない傘の骨
/ インアン

骨は折れてしまえば強くなるというフレーズをあてはめながら
/ ゼロの紙

まっすぐに治りきらない骨たちのままで固めて歩行する足
/ 綿鍋和智子

まつ白な蛹は強さを身につけていつか誰かの英雄として
/ 碧乃そら

しらしらと夜明けに飛んでゆく蝶の鱗粉の軌道ひかりをうけて
/ 水の眠り

ゼロの紙
第1回フーコ短歌賞受賞作
『ゼロ・ゼロ・ゼロ』
を1999年に刊行
Xでは短歌文通や
いちごつみのふたりで
詠むスタイルも好きです
猫舌&左利きで
パン屋さんが好きです
X zeronokamides

先生さよならみなさまようならまた会う保証のある明日まで
/ 綿鍋和智子



両の手に押し寄す水の感覚はもう過ぎ去った流れのなごり
／一ノ瀬美郷

綿鍋和智子

鴨川の流れは絶えずしてわれもみやこの水に手を浸して
／一ノ瀬美郷

カップルが等距離で座る鴨川の風は独りのわたしにも吹く
／一ノ瀬美郷

綿鍋和智子

JR京都駅から出るバスの昨日と変わらないアナウンス
／一ノ瀬美郷

綿鍋和智子

碁盤の目京都の通りすり抜けてバスが澄み切る鴨川をゆく
／一ノ瀬美郷

綿鍋和智子

アクセント西に来たこと思い出す『ようこそ』京都駅は秋口
／一ノ瀬美郷

綿鍋和智子

上方の言葉だ「来はる」と言われたら「来はる」だけの価値のある我
／一ノ瀬美郷

綿鍋和智子

ショウもない話のできる友だちが真似た関西弁がやさしい
／一ノ瀬美郷

綿鍋和智子

たこ焼きが食べたくなつたら他のもの替えのきかない友達のよう
／水の眠り

綿鍋和智子

甘えたくなつたらきっとたこ焼きを焼くね厳しいおかんみたいに
／春永睦月

春永睦月

バイリンガルになれた気がしたセブイレもケンチキももうこそばくはない
／インアン

綿鍋和智子

「蚊に刺される」を「蚊に噛まれる」っていう君の無意識にある蚊の口のこと
／一ノ瀬美郷

綿鍋和智子

「あほやなあ」わたあめみたいに溶けたわあ。あなたが真似たわたしの口ぐせ
／碧乃そら

綿鍋和智子

阿呆という呼びかけに愛あることを知らない関東平野夕焼け
／一ノ瀬美郷

綿鍋和智子

なぐさめるときだけ使う関西弁それがきみのやさしさだった
／古井 哲

古井 哲

もうずっと使ってなかつたふるさとの言葉にもう一度めぐり逢う
／一ノ瀬美郷

一ノ瀬美郷

あのひとが話す同じ関西弁わたしの体温をわずかに上げる
／古井 哲

古井 哲

永遠に我の居られぬふるさとがあなたにはあるお国言葉で
／綿鍋和智子

一ノ瀬 美郷(いちのせみさと)

短歌をはじめて3年、雨とプリン体が好きです
人見知りですが返歌の魅力にどんどん
はまっていっています！
X:@kimono_misato
好きな動物はカワウソです

わた毛よりかろき手紙ははるかぜを味方につけて飛んでゆきたり

碧乃そら



書き切つて出さないことにした手紙行き場所のない切手を貼る位置

碧乃そら

あなたには渡さぬ手紙に火をつけることもできずにぼろぼろと雨

一ノ瀬美郷

葉の落ちた枝にリボンを巻き付けて真紅は冬のはじめを結ぶ

綿鍋和智子

えんぴつでラインを引いた一行にふくまれてゐるあなたの名前

碧乃そら

繰り返し名前を叫んでもいい日 秋のリレーの最終周で

碧乃そら

色褪せたように見えてもひとつだけあなたに会えたしあわせがある

一ノ瀬美郷

焦げを取りハムとチーズを挟んだらカフェの装ひ 赤のマグカップ

碧乃そら

眠らない眠れない星にするための八時のコーヒーミルクは抜きで

綿鍋和智子

三日月はそれでもひかるうとしたクロワッサンを焼いてく夜明け

綿鍋和智子

美しい眠れない夏の暮

綿鍋和智子

立ちあがる気持ちが形になるようクロワッサンはこんがり焼けた

水の眠り

ヘツセにゲーテリルケにランボーヴェルレーヌ生きてるあなたの色褪せぬ言葉

古井 哲

『車輪の下』ハイルナーに魅了さる心に同化する夏の暮

碧乃そら

ヘツセには私がわかつていたようでクジヤクヤママユを触らせてくれ

綿鍋和智子

生きること 色の褪せたる詩集からそつと一行なぞつてみること
詩集からあなたのお棺に入れる時何ページ目を破るか思う

綿鍋和智子

迷はぬやう葉をはさむ精霊の導くさきに泉あふれて

春永陸月

ヘツセにゲーテリルケにランボーヴェルレーヌ生きてるあなたの色褪せぬ言葉

古井 哲

『車輪の下』ハイルナーに魅了さる心に同化する夏の暮

碧乃そら

迷はぬやう葉をはさむ精霊の導くさきに泉あふれて

碧乃そら

背表紙のそろつたノートに詰まつてゐる煮詰められた作家の日記

水の眠り

五百年前の日記をひらくとき書かれなかつた日付を探す

綿鍋和智子

魔女の鍋で煮詰めてみてもわたくしの醜き日記は醜きままに

碧乃そら



頁のあわいからシナモンの香りして言の葉が宙を舞う午後

ゼロの紙

西日の窓にシェードをかける真夜中の図書室で言葉よ眠れ

ゼロの紙

その場所に変はらずあること 司書教諭 肉桂色の背表紙を撫づ

碧乃そら

五百年前の日記をひらくとき書かれなかつた日付を探す

綿鍋和智子

卒業のあと一度も借りられぬ本こそ好きな図書室にあり

綿鍋和智子

背表紙の裏のポケット空っぽてみんなの足跡は置き去りのまま

碧乃そら

陽の射さぬ本棚の隅 ながめせし間にうつすらと埃が積もる

碧乃そら

色褪せた分類記号をはりなおし紛れた記憶をよびもどしてゆく

水の眠り

その場所に変はらずあること 司書教諭 肉桂色の背表紙を撫づ

碧乃そら

五百年前の日記をひらくとき書かれなかつた日付を探す

綿鍋和智子

卒業のあと一度も借りられぬ本こそ好きな図書室にあり

綿鍋和智子

背表紙の裏のポケット空っぽてみんなの足跡は置き去りのまま

碧乃そら

阳の射さぬ本棚の隅 ながめせし間にうつすらと埃が積もる

碧乃そら

色褪せた分類記号をはりなおし紛れた記憶をよびもどしてゆく

水の眠り

その場所に変はらずあること 司書教諭 肉桂色の背表紙を撫づ

碧乃そら

五百年前の日記をひらくとき書かれなかつた日付を探す

綿鍋和智子

卒業のあと一度も借りられぬ本こそ好きな図書室にあり

綿鍋和智子

背表紙の裏のポケット空っぽてみんなの足跡は置き去りのまま

碧乃そら

阳の射さぬ本棚の隅 ながめせし間にうつすらと埃が積もる

碧乃そら

色褪せた分類記号をはりなおし紛れた記憶をよびもどしてゆく

水の眠り

その場所に変はらずあること 司書教諭 肉桂色の背表紙を撫づ

碧乃そら

五百年前の日記をひらくとき書かれなかつた日付を探す

綿鍋和智子

卒業のあと一度も借りられぬ本こそ好きな図書室にあり

綿鍋和智子

背表紙の裏のポケット空っぽてみんなの足跡は置き去りのまま

碧乃そら

阳の射さぬ本棚の隅 ながめせし間にうつすらと埃が積もる

碧乃そら

色褪せた分類記号をはりなおし紛れた記憶をよびもどしてゆく

水の眠り

その場所に変はらずあること 司書教諭 肉桂色の背表紙を撫づ

碧乃そら

五百年前の日記をひらくとき書かれなかつた日付を探す

綿鍋和智子

卒業のあと一度も借りられぬ本こそ好きな図書室にあり

綿鍋和智子

背表紙の裏のポケット空っぽてみんなの足跡は置き去りのまま

碧乃そら

阳の射さぬ本棚の隅 ながめせし間にうつすらと埃が積もる

碧乃そら

色褪せた分類記号をはりなおし紛れた記憶をよびもどしてゆく

水の眠り

その場所に変はらずあること 司書教諭 肉桂色の背表紙を撫づ

碧乃そら

五百年前の日記をひらくとき書かれなかつた日付を探す

綿鍋和智子

卒業のあと一度も借りられぬ本こそ好きな図書室にあり

綿鍋和智子

背表紙の裏のポケット空っぽてみんなの足跡は置き去りのまま

碧乃そら

阳の射さぬ本棚の隅 ながめせし間にうつすらと埃が積もる

碧乃そら

色褪せた分類記号をはりなおし紛れた記憶をよびもどしてゆく

水の眠り

その場所に変はらずあること 司書教諭 肉桂色の背表紙を撫づ

碧乃そら

五百年前の日記をひらくとき書かれなかつた日付を探す

綿鍋和智子

卒業のあと一度も借りられぬ本こそ好きな図書室にあり

綿鍋和智子

背表紙の裏のポケット空っぽてみんなの足跡は置き去りのまま

碧乃そら

阳の射さぬ本棚の隅 ながめせし間にうつすらと埃が積もる

碧乃そら

色褪せた分類記号をはりなおし紛れた記憶をよびもどしてゆく

水の眠り

その場所に変はらずあること 司書教諭 肉桂色の背表紙を撫づ

碧乃そら

五百年前の日記をひらくとき書かれなかつた日付を探す

綿鍋和智子

卒業のあと一度も借りられぬ本こそ好きな図書室にあり

綿鍋和智子

背表紙の裏のポケット空っぽてみんなの足跡は置き去りのまま

碧乃そら

阳の射さぬ本棚の隅 ながめせし間にうつすらと埃が積もる

碧乃そら

色褪せた分類記号をはりなおし紛れた記憶をよびもどしてゆく

水の眠り

その場所に変はらずあること 司書教諭 肉桂色の背表紙を撫づ

碧乃そら

五百年前の日記をひらくとき書かれなかつた日付を探す

綿鍋和智子

卒業のあと一度も借りられぬ本こそ好きな図書室にあり

綿鍋和智子

背表紙の裏のポケット空っぽてみんなの足跡は置き去りのまま

碧乃そら

阳の射さぬ本棚の隅 ながめせし間にうつすらと埃が積もる

碧乃そら

色褪せた分類記号をはりなおし紛れた記憶をよびもどしてゆく

水の眠り

その場所に変はらずあること 司書教諭 肉桂色の背表紙を撫づ

碧乃そら

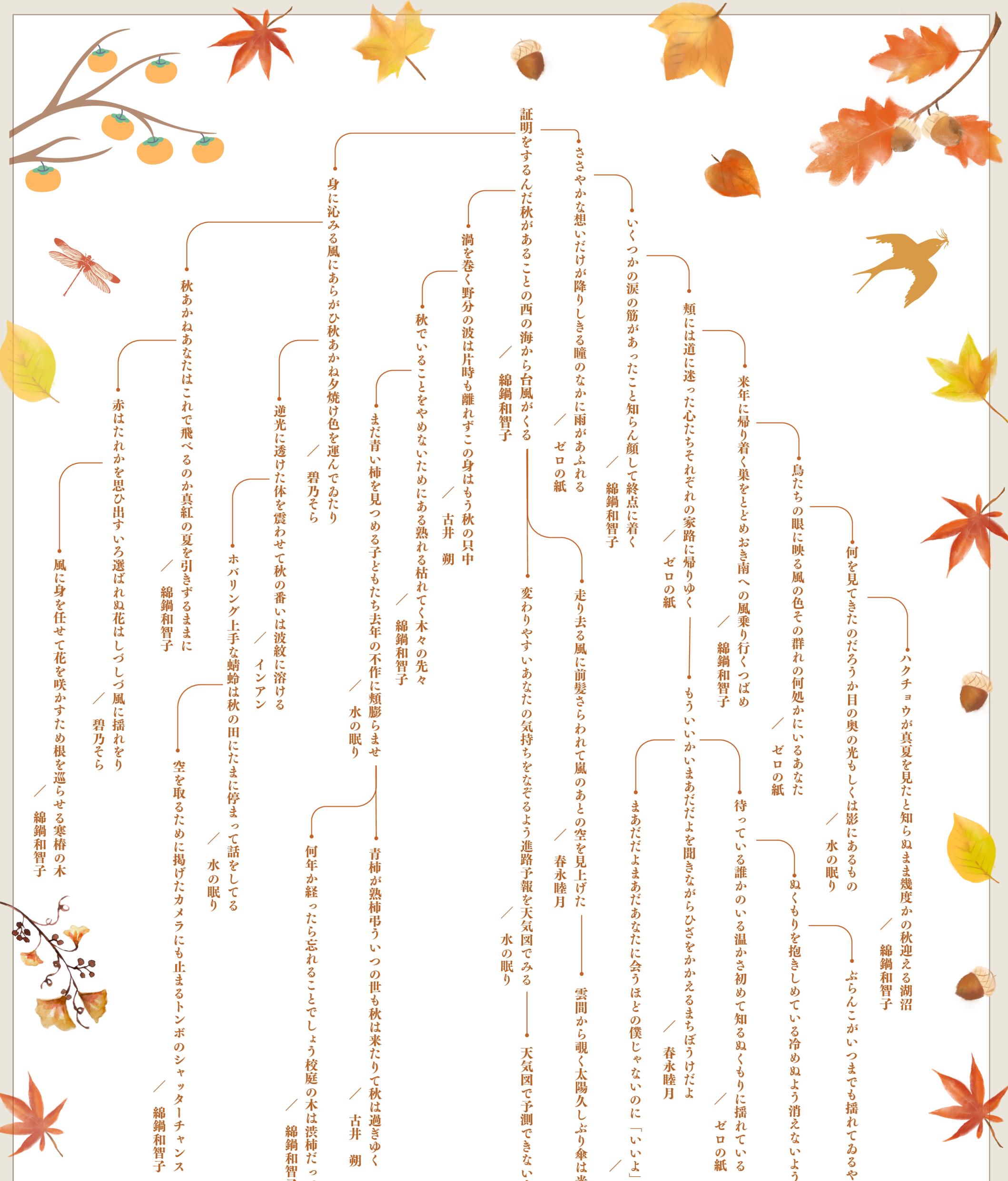
五百年前の日記をひらくとき書かれなかつた日付を探す

綿鍋和智子

卒業のあと一度も借りられぬ本こそ好きな図書室にあり

綿鍋和智子

背表紙の裏のポケット空っぽてみんなの足跡は置き去りの



綿鍋 和智子

短歌は長い中断のあと、2022年から
再開しました。自分の短歌からこんなに
短歌が繋がっていく過程が見られるのが
本当にありがとうございます
また言葉を繋げたいです

threads:mefuchsia29

X:MeFuchsia

好きな動物はなぬき

力的な動物はたまごです



薔薇色のワインがあつたと知らぬまカサブランカを生けてるボトル
／綿鍋和智子

熟成を経て葡萄酒はまろやかにほのかな樽香グラスに満ちる
／古井 哲

もう少し寝かせておけば良かつたとロゼのボトルを開けてから知る
／水の眠り

切り戻す鉄を銀に光らせて花を再び咲かせましょうか
／綿鍋和智子

ヴァニリンと少し気取って呼ぶ声を懐かしみつつ琥珀をゆらす
／春永睦月

果実だと忘れた頃に樽を開け葡萄酒いまはグラスをくぐる
／古井 哲

綿鍋和智子

スキな星一粒一粒つまんでは夜空にボクらの葡萄ひと房
／古井 哲

綿鍋和智子

繫いでは僕らの星座をかたりあう名のある星と名も知らぬ星を
／古井 哲

綿鍋和智子

星座にはなれない星も輝きは誰かに届くボクはみてるよ
／古井 哲

綿鍋和智子

六等星その瞬きをしるべとし回り続ける惑星もあり
／古井 哲

綿鍋和智子

荒れ狂う風にあそばれ花たちは振るわれてゆく実を結べずに
／古井 哲

綿鍋和智子

星座にはなれない星の瞬きがぼつりぼつりとかなしみを蒼く
／碧乃そら

綿鍋和智子

まだ色を宿しておらぬ碧い粒つまんでくれる指を待ちつつ
／古井 哲

綿鍋和智子

まだ色を宿しておらぬ碧い粒つまんでくれる指を待ちつつ
／春永睦月

綿鍋和智子

碧いままみずから糖度増すことを選ぶシャインマスカットの粒
／古井 哲

綿鍋和智子

ひとつぶになるはずのはじまりの歌 双葉だけが耳を澄ませて
／古井 哲

綿鍋和智子

光合成したくて緑のワンピース双葉から本葉へつながるかけ橋の
／古井 哲

綿鍋和智子

蒼いた後双葉と双葉はなしてるどちらが先に花となるかを
／古井 哲

綿鍋和智子

種無しの葡萄に母はいるのかな 期待されずに間引かれる苗
／古井 哲

綿鍋和智子

まだ色を宿しておらぬ碧い粒つまんでくれる指を待ちつつ
／春永睦月

綿鍋和智子

碧いままみずから糖度増すことを選ぶシャインマスカットの粒
／古井 哲

綿鍋和智子

碧いままみずから糖度増すことを選ぶ